

個人訳全集の完成と 第14回年次大会（鹿児島）の成功

会長 辻 井 栄 滋

きょうはもう7月15日、京都では祇園祭のコンチキチン、コンチキチンの鐘の音がにぎやかに鳴り響いています。うだるような夏の京都ですが、今年は京都だけではないようで、昨日は静岡県浜松市で38℃を超えたそうです。アスファルト・ジャングル、排気ガス、クーラー等々によって、現代文明人はこの愛すべき地球に対しひどい仕打ちを重ねてきましたが、温暖化現象は地球があげる悲鳴の1つなのでしょう。私たちが追求してきた安易な利便性に対するしっぺ返しが始まったのだと申してもいいかも知れません。何とか早く手を打たないと、私たちはもうとり返しのつかない状況に自らを追いこむことになるでしょう。

昨年の7月以来苦闘を続けておりました『決定版 ジャック・ロンドン選集』は、昨秋10月下旬に第1回配本（1・2・3巻）を、そしてこの4月下旬には第2回配本（4・5・6巻）となり、ついに全6巻が揃いました。とりわけこの冬は厳寒が続きましたので、さすがの私もひどい咳とハナと微熱に長いあいだ苛まれての大仕事でした。後ろの書評や感想、あるいは広告をごらんくださって、ご一緒に喜びを共有していただければ幸甚の至りです。地元や大学の図書館・研究室等にリクエスト・採用していただいて、末長くロンドン作品が1人でも多くの人たちに愛読されることを心から願っております。

さて、今回の年次大会は鹿児島市中央公民館の一室をお借りして、無事盛会のうちに終えることができました。遠方にもかかわらず、名古屋、京都、兵庫、九州各県からの会員も含め総勢40名ほどの皆さんにご参加いただき、充実した半日を過ごすことができました。

第9回大会以来5年ぶりの鹿児島における開催でした。森孝晴先生をはじめ地元の実行委員会に加わってくださった方々、充実した研究発表をさせていただいたお2人（鎌田京子、野口忠昭の両氏）、ご講演をお願いした門田明先生、そして参加者の皆様方に厚く御礼申しあげます。[翌朝、帰途の鹿児島空港のレストランで鹿児島ゆかりの“長沢ワイン”を見つけ、思わず「グラスワイン」を注文してしまいました。J・ロンドン晩年の地グレン・エレンの北に位置するサンタ・ローザと鹿児島は、長沢^{かなえ} 鼎の縁で友好協会の関係を結んでおり、J・ロンドン・ワインのジンファンデルに似たその赤ワインは、深い味わいのあるものでした。]

最後に、J・ロンドン是一般愛読者のみならず、研究者のあいだにも少しずつつ広がりを見せています。その一端をご紹介します。今年の日本文学学会第78回大会（5月20日）において、東京大学大学院生の高村峰生氏が「ジャック・ロンドンにおける「体験」の位相」と題する研究発表をされていますし、本会会員で関東学院大学の深沢広助氏がこの3月末にJ・ロンドンの短篇集『南海物語』（春風社）を出版されています。ロンドンの知られざる側面が多面的に研究・紹介されてゆくのは、同じ道を歩んできた者としてうれしいことだと思います。 (2006.7.15)

